

報告タイトル

反体制運動から政権与党へマレーシア・人民公正党(PKR)の政党組織論的研究序説(1998～2022年)

Exploring the Development of Parti Keadilan Rakyat (PKR) in Malaysia: A Preliminary Study on Party Organization, 1998-2022

氏名(所属)

伊賀司(名古屋大学)
IGA Tsukasa (Nagoya University)

要旨(800字程度)

本報告はマレーシアの人民公正党(PKR)の政党組織論的研究を始めるにあたり必要なクエスチョンや枠組みを整理することで、長期与党体制からの移行期にある新興国での政党(特に野党)の組織、党员・支持者へのインセンティブ、カリスマや象徴、タイミングなどが体制転換に果たす役割についての予備的考察を行う。

マレーシアは2018年の総選挙で独立から60年以上続いた連盟党・国民戦線(BN)による長期与党体制から史上初の政権交代を果たした。連盟党・BN体制からの体制移行で中心的な役割を果たした組織の1つがPKRである。PKRの直接の起源は、1998年に当時の副首相だったアンワル・イブラヒムがBNの中核政党である統一マレー人国民組織(UMNO)と政府から追放されたことを機に発生した改革運動(レフォルマシ運動)のなかで結成された社会公正運動(ADIL)にある。そこから20年かけ連邦下院や各州議会で足掛かりを得て政権交代の中心的な立役者となった。

しかし、これまでのところ組織としてのPKRを直接的対象とした研究は非常に少ない。PKRが論じられるときは、トップの指導者のアンワルのリーダーシップに注目が集まりがちで、象徴的なカリスマが媒介となって始まった反体制運動から組織を発展させ、遂に長期与党体制を打ち倒すまでに至った組織内外の条件や誘因などはあまり注目されない。また、選挙研究として有権者の政党支持の状況や変化が注目されたり、政党間の連合や離反に焦点を当てた政党システム論的解説がなされたりすることはあるが、20年という比較的長期のスパンで起こった組織の変化については依然としてブラックボックスのままである。

報告者はPKR関係者へのインタビューなど予備的調査を最近始めており、本報告ではPKRを対象とする政党組織論的研究を今後、発展させていくための論点整理を行いたい。その際には主にパーネビアンコによる政党の制度化と発生期モデルの理論に依拠してPKRの形成・発展過程について仮説を交えながら記述を進めていきたい。